る。今までに「見徳一炊夢」は「金々先生栄花夢」からの影響のみが説かれていたが、私は「高漫斉行脚日記」からの影響が多大であるという事を強調しておきたいと思う。

東国東郡安岐町方言における あいさつことば

永松一恵

目次

はじめに
一、研究の動機と目的
二、調査
三、調査地概説
本論
第一章　日々のあいさつ（路上の出会）
第二意　労働のあいさつ
第三章　訪問のあいさつ
第四章　辞去のあいさつ
第五章　物品贈答のあいさつ
第六章　勧めるあいさつ
第七章　特別な行事のあいさつ
第一節　お盆のあいさつ
第二節　結婚のあいさつ
結び

はじめに

一、研究の動機と目的

国東地方は、半島で一地方を形成し、他地区との交流も少なく、大分方言のなかでも独特な形が、数多くみられる。安岐町は、筆者の母の出身地で、現在祖父母が健在で、幼い頃からなじみの深い土地である。未知の土地よりは正確な調査が出来るであろうし、熟知の土地よりも新鮮な目が向けられるだろうと判断した。以上の点か

ら、かねてより方言に関心があったので、国東半島東南部の安岐町方言を調べることにした。

方言を研究するうえで、方言人の生活意識や発想は、常に基本となり、重要な課題であるが、あいさつことばは、それらの要素を最もよく含むと思われる。方言人の言語生活を知る手がかりとしては適当な分野であろう。

あいさつことばを、発想や品位、機能などの面からとらえて、方言事実を明らかにし、その特質にふれると共に、今後の方向をも見出したいというのが、本稿の目的である。

二、調　査

調査は、大分県東国東郡安岐町下原を中心に行なった。五回延べ二十五日間にわたる実地調査で、自然傍受を中心に、質問で不備を補い、資料を確実にする方法をとった。被調査者は、土地人の全年令層にわたるが、少年層はあいさつ生活が確立していないため、参考程度で、中・老年層のカードが多くなった。あいさつの瞬間をとらえるので、録音法はあまり効がなく、カード中心でした。

三、調査地概説

1、位置・地形

安岐町は、大分県の東北方、瀬戸内海へ突出した国東半島の東南部に位置し東は豊後水道、西は豊後高田市、太田村、南は杵築市、北は、武蔵町、国東町に隣接している。面積は九〇・〇三平方キロメートルである。北部の両子山（七二一m）を要に、海岸に向かって放射状に展けた地形で、総面積の六二％が山林で占められ、耕地は三二％である。

調査地は安岐町の東側にあたる

2、沿　革

安岐郷は、古代には六郷満山の文教文化を中心に隆盛を極め、近世においては三浦梅園哲学が開花した。徳川時代から明治の初期にかけて、杵築藩の支配下に属していたが、昭和二十九年三月町村合併法により、西武蔵村　来朝村、西安岐町、安岐町、南安岐村、奈狩江村の一部が合併して、新しい安岐町が生まれ、今日に至っている。調査地は、旧安岐町である。以下調査地は安岐地区で示す。

3　人口・産業

昭和四十三年の調査では、戸数三〇五五戸、人口一二八三五人、うち男六一〇四人、女六七三一人で、二十代の男女が極端に少なく、青年層の都市への流出を物語っている。安岐地区の人口は三四三六人、戸数八〇八戸である。

農業が全体の七三％を占め、次いでサービス業八％、卸小売業七％となっている。農業は、水稲、七島、みかんで総生産額の八三％を占めるが、近年七島がイ草におされて伸び悩み、みかんが急速に伸びている。安岐地区は水稲、七島が多い。専業農家は減り、若年層の離農が目立つ。

4、交　通

交通機関は、昭和三十六年の水害で、従来の軽便鉄道が廃止され

て以来、バス路線のみである。国東町と杵築市の中間にあるため、国道筋は交通の便が良い。中心地大分、別府へも二時間程度で行ける。四十六年秋に、新空港が安岐町と武蔵町にまたがって完工すれば、ます〳〵中心地との交通の便は良くなることであろう。しかし、国道からはずれた地域や町内の移動に、交通は不便で、今後の開発も望めない状態である。自動車の普及はめざましく、生活必需品となっている家が多い。

（資料は、町役場発行の、一九六九年度版「展望・安岐町」による。）

本　論

第一章　日々のあいさつ（路上の出会）

社会生活を営むうえで、構成員同士の滑らかな接触は、最も望まれることである。同じ社会の一員であるという「仲間意識」から、人間関係を尊重し、円滑にしていこうとする気持は、人の出会いの都度「あいさつことば」を交わすという形をとらせる。声をかけるということは仲間であることを表示することである。路上で会えば必ずことばを交わす。しかし、若い人々には、丁寧なあいさつや、見知らぬ人へのあいさつの意識は非常に低い。

1、朝の出会い

○オハヨー　ゴザイマス。おはようございます。

○オハヨー　ゴザリマス。おはようございます。

最も一般的な形である。後例は老年層に多く、男女による使用差はない。

○ハーヨ　ザイマス。おはようございます。

○オハヨ　アス。おはようございます。

前例は中年女子に、後例は老年男子によくみられる。気軽な親しいあいさつで、品位は中である。

青年層以下には、極端な簡略形「オハヨー」があるが、対象は同年輩以下に限られる。中年層以上は、音声の変化はあるが丁寧な形を保っており、オハヨーはほとんど使わない。

朝のあいさつことばとして「オハヨーゴザイマス」が定着していて、昼近くまで使われる。本来の意味である相手の早起きをたたえる気持はもう無いようである。この表現が形式的になってきたため、朝のあいさつをこの形のみですませるのは、あまりに簡単で、相手に失礼である。物足りないと思う意識からか、後にあいさつことばを重ねる場合がほとんどである。続けることばは天候に関するものが多い。こうして、この地方の朝のあいさつは、二重三重の丁寧なものになっている。ことばを重ねるのは朝のあいさつに限らない。

○オハヨ　アス。ウットーシー　ヒジャナー。　おはようございます。うっとうしい日ですね。　（老男中女）

○コンニチワ。アツイ　ナー。こんにちは、暑いですね。（老女→中女）

以前は「オハヨーゴザイマス」で十分あいさつの機能を果し、相手の早いのをたたえる気持が表現できていたのだが、それが頻繁に使われだし、あいさつ表現として定着すると、本来の機能が薄れたので、新しいことばを言い足して親しみを表現しようとする気持が、

起こったためであろう。

○オハヨー　ゴザイマス。ハエーナー。
　おはようございます。早いですね。　（中女中男）

などは、そのことをよく表わしている。

2、昼の出会い　　略

3、午後の出会い　　略

午後は、家で昼休みをして、また畑へ戻っている人によく会う。次のように声をかける。

○オヒル　ヨコータ　カエ。お昼は休みましたか。（中女→中女
○オヨカイ　ナサレマシタ　カ。　お昼休みをなさいましたか
　（老男中男）

後者がより敬意が高く、丁寧な言い方である。午前中の勤労をたたえ、十分な休息をとねぎらい、昼からまた精出しましょうと呼びかける、味わい深いあたたかいことばである。

4、夕方から夜にかけての出会い

夕食がすんだかどうかと声をかけあうことが多い。「コンバンワ」は聞かれなかったが、若い人は使うということである。

○モー　タベタ　ン。もう食べましたか。　（中女中女）
○シモータ　カエ。（夕食は）すみましたか。　（老男中女）
○オシマイマシタ　カ。おすみになりましたか。

敬意の低い順に並べた。第三例は老年男子の教示である。「しまう」は必ずしも「夕食をすます」という意味ではなく、一日の仕事の全てがすみましたかという気持が含まれる。

5、健康に関するあいさつことば　　略

第二章　労働のあいさつ　　略

第三章　訪問のあいさつ

日常生活の中で、人とのつきあいは重要な位置を占める。用事の有無、未知既知の別に関係なく、他人を訪問することは多い。その際のあいさつは、相手に敵意を持っていないこと、あるいは親近感を表現して警戒心を解くこと、同一社会の仲間意識を確認しあうことといった目的を持つ。毎日会う人に敵意のなさを示す必要もないが、しばらくでも会わなかった人などには、互いに懇意であることを確認しあう必要がある。

訪問のあいさつことばを、ⓐ朝・昼・晩の訪問と　ⓑ時間に関係ない訪問に大別し、ⓑをさらに発想から四つに分類してみた。

以下略

第四章　辞去のあいさつ

辞去には、人家辞去と、一般的別れとがあるが、両方を発想を中心に考えてみる。また送るあいさつをみると、その発想には類似点が多い。去る側と送る側を対応してみていく。

辞去のあいさつは、生活共同体の仲間意識を基盤にして、相手の幸福を願う、許容を乞う。親近感を表わすといった目的を持つ。

1、会話に区切りをつける発想

○フンナ。ホンナ。それでは、
○サヨーナラ。サイナラ。さようなら。

本来辞去のあいさつは、さて帰ろうという時、「それならば」などという接続詞で話をしめくくり、次に辞去のことばを続けてなされていたものと思われる。例はどちらも「それならば」という接続詞が変化したものであろう。前例は立ちながら、「じゃあ」と帰るきっかけを作る軽いあいさつことばとして、時に中年以上の人に頻用される。他の辞去のあいさつことばと共に使うのが普通である。

○フンナ　スンマセン。それじゃすみません。

○ホンナ　マー　オジャマシマシタ。

それではまあお邪魔しました。（老男老女）

この例は「フンナ・ホンナ」が、まだ接続詞としての機能を十分持ち、独立したあいさつことばとして、定着するに至っていないことを表わしているといえよう。

それに比べ後例は、修飾部の役割から独立し、すでに辞去のあいさつことばとして定立している。品位は高くはないが、簡単な気軽なあいさつことばとして使用頻度は高い、しかし、老年が進んで使うことは少なく、相手が言った場合、おうむ返しに使う例が多いようである。いよいよ帰る時、あるいは帰りながら発する場合がほとんどである。いわば、最終的辞去のあいさつことばである。

○フンナ　サヨーナラ。それではさようなら。

この例は以上述べたあいさつことばの性質をよく表わしているといえよう。

2、感謝や許容を乞う発想
3、思いやりの発想
4、次回の約束をする発想
5、自分に言いきかせる発想
略

辞去のあいさつは今回の調査で最も分類、考察が困難な分野であった。

仲間意識を大切にする生活の中で、今までのつながりに短かいことばで上手に区切りをつけて、気持良く別れるのは気を使うことであろう。人々は、後に残ったしこりや誤解で、日常生活がまずくなることを非常に恐れる。そこであいさつことばもきっぱりした表現よりも、あいまいな表現を取るようになる。あいまいな表現に、以後のつながりを保とうとする方言人の気持が表われているといえよう。場面や相手に応じて、心を込めた別れを告げるには、定型化し習慣化された表現などで間に合わせるわけにはいかないので、辞去のあいさつ表現は多様となるのであろう。

送るあいさつことばの種類が少なく、簡単なのも特徴である。おうむ返しに同じあいさつをするか、あいづちを打つ例が一番多い。辞去する側と同じ心理作用があるものと思われる。

第五章　物品贈答のあいさつ

生活共同体の中で、人間関係を尊重し、円滑にしようとする意識は、物品贈答という形をとり、そのあいさつによく表われる。ここでは水や花を貰うという場面も、物品贈答として扱った。

贈る者は謙遜と親愛の情でいっぱいである。

○ヒトッチャケンド　タベチョクレ。

ひとつですけれど食べてください。（中女→中女）

○コリャー　オイシュ　ネーカ　シランが　タベョ。

これはおいしくないかもしれませんが食べてください。（中男→老男）

○クゼン　ジョージ　スマンケンド　チットジャケンド。
くずばかりですみませんけれど、すこしですけれど（どうぞ）（中女→中男）
いずれも贈る品物の量や質を謙遜、卑下し、このようなものでもどうぞという発想からの表現で、逆接を用いて動詞に続ける。動詞を略すこともある。
○コドモサンニ　アゲチョクレ。
子供さんにあげてください。（老女→中女）
○オヤツニデン　オショ。
おやつにでもしなさい。（老女→青女）
贈る対象や用い方を謙遜する表現をとって、品物がたいしたものではないと、相手が気を使わないようにするあいさつの例である。
○ツクッタンジャケンド　タベテ　ミチョクレ。
作ったのですけれど食べてみてください。（中女→老女）
自分が作ったもの、あるいは自分の家でとれたものですがと、由来を謙遜し、出来映えを恥ずかしがる気持と共に、相手が贈られることによって受ける心理的負担を少しでも軽くしよう、心配するほどのものではないからという。思いやりのある暖かい発想が伺える。
「動詞の連用形＋チョクレ」は、相手に請い願う意味の「～シテオクレ」から変化したものである。敬意度は中から上で、全年令層に頻発される。目下に対して使うのは、間接的に目上や遠慮のある人に関係ある場合や、親が子に用事を頼む場合などに限られる。
○ヨロシュ　ユーチョクレ。よろしく言ってください。
○チョイト　シモイ　イッチ　キチョクレ。
ちょっと下に行ってきておくれ。（中女→中学、女）
しかし、物を贈る場合には、丁寧なやさしい言い方として、目下に使うこともまれにある。「食べてください」というのを、敬意の低い順に並べると、次のようになる。
○オタベ。タベヨ。
○タベチョクレ　。
○オアガッチョクレ。
「チョクレ」は使用範囲の広い便利な動詞で、人々はその場に応じて巧みに使いこなしている。しかし、丁寧に言おうとするあまりに、滑稽とも思えるような例もあった。
○ヒトーツ　オトッチョクレ。
ひとつお取りください。（老女→中男）
普通なら「ツマンヂョクレ」などと言うところを、さらに丁寧に言おうとしたのであろう。
「～シテクダサイ」も例は少ないが使われる。青年層が目上に物を贈る場合は、ほとんど「～シテクダサイ」である。
文末の動詞を省略した形や、主内容を欠いたあいまいな言い方で、物を贈ることがある。
○コリャ　ナンジャ　ケンド。
これはなんですけれど（中男→老男）
○ナンノ　タベタカロートモーチ。
どういたしまして。食べたいだろうと思いまして。（中女→老女）
○インネ　チットジャ　ケンド。
いいえすこしですけれど。（老女→老女）
贈る口上を述べた後、それに対する相手のお礼や感嘆のことばに答

えて発せられたものに、この形が多い。直接に「あげる」と言わずに、文末を略したり、あいまいに言ったりすることで、おしつけがましくなることを避けようとする発想である。贈る時の動作が、あいさつことばを助けていることも原因であろう。

次に受ける側の場合を考察してみる。

○オーキニ。　オーケニ。ありがとう。

各年令層に頻用される一般的謝辞である。本来、実内容を表わす「アリガトー」や「スミマセン」の修飾機能を持っていた部分が独立して、謝辞となったものである。

○オーケニ。スンマセン。

ありがとう。すみません。（老女→中女）

かなりの間を置いて言われた。二つの謝辞を重ねて謝意を強調したものとみなされる。ことばを重ねて意味を強調する例は多い。

○アー　スマンジャッタ　ナー。オーキニ。

ああすみませんでしたね。ありがとう。（老女→中女）

○ソリャ　スンマセン。アリガト。ワリーナー。

それはすみません。ありがとう。悪いですね（老女→中男）

「スンマセン」も広く使われる。青年層は「スイマセン」と「イ」を明確に発音する。

その他「アリガトー」（ありがとう）「ゴッツオサン」（ごちそうさま）など感謝を表わすことばは多い。

品物をほめたり、労をねぎらったり感嘆したりする発想からの謝辞もある

○メズラシイ　モンオ。

珍らしいものを（ありがとう）。（老女→中女）

○オーケナ　コツ　たくさんなこと。（老女→中女）

○ホネ　オッチョイテ　ワリー　ナー。

骨をおって（堀ったのに）悪いですね。（老女→中女）

以下略

第六章　勧めるあいさつ　　略

第七章　特別な行事のあいさつ

第一節　お盆のあいさつ　　略

第二節　結婚のあいさつ

結婚は人生の重要な儀式であり、村人の生活に占める要素も影響も大きい。しかし古老の思い出話や、私の記憶にある結婚式に比べ大変合理化されていることを感じた。幸い調査期間中に一組の結婚式があったので、自然傍受法と質問法で調査した。式を中心に前後のあいさつを時間をおって考察してみる。

仲人は「ナコードニン」や「セワニン」で、結納は「ナカシューギ」という。結婚式は「シューゲン」が普通である。式の前に嫁に行く娘の家では「オワカレ」といって小宴を張る。

1、式の前のあいさつ

全体を通して言えることだが、改まったもの言いと、路上での立話的なあいさつことばの間に大きい差がある。

○アルク　ヨーニ　ナリマシタ　ケンド　ドーゾ　ヨロシュ　オタノ　モーシマス。

歩くようになりましたけれどどうぞよろしくお頼みします。

娘の母親がする改まったあいさつことばである。「アルク」の意味を質問してみたが明確な答えは得られなかった。結婚のあいさつをして歩くようになったという意味であろうか。

○ヨメサンガ　キマッチェ　オテツキマシタ　ナ。ゴアンシンデ　ゴザイマショー

嫁さんが決まって落ち着きましたね。御安心でございましょう（老女→中女）

○アンタタ　フガ　ヨカッタ　ナー。オメデトー　ゴザイマス。

あなたの家は運がよかったですね。おめでとうございます。（中女→中女）

○アンタガタ　ヨメゴ　モローチュタ　ガホント　カエ。

あなたの家では嫁をもらうということですが、本当ですか。（老女→中女）

祝いのことばも心のこもった丁寧な形が多い。事柄の重要さが、うかつな物言いをさせないのであろうか。第三例はくだけた気さくな例ではあるが、暖かい人情が感じられる。

2、当日のあいさつ

○オヒガラ　ヨー　ゴシューギデ　オメデトー　ゴ　　ス。

お日柄良く御祝儀でおめでとうございます。

中年以上の男女に、一般的なあいさつことばとして、式場でも路上でも後日でも、最もよく使われる。「ゴシューギ」の部分が「オアルキ」や「オヒッコシ」に変わることもある。

○コンニチワ　アイスミマセン。オマネキニ　アズカリマシテ　エンリョナク　マイリマシタ。

今日はすみません。お招きにあづかり遠慮なく参りました。

○ケイショーナ　コトデ　オイワイノ　シルシ　バッカシデ　ゴ　サイマス。

わずかなことでお祝いの気持だけでございます。

ことばを続ける。出席者は戸主や老人が多いので、あいさつは丁重で形式化されている。一方、招待側は次のようにあいさつする。前者は中年女子、後者は老年女子の教示である。

○イロイロト　モローチ　アリガトー　ゴザイマシタ。ニンズガ　イミリマシタカラ　オネガイ　シマス。

いろいろといただいてありがとうございました。人数が増えましたからお願いします。

○ナンノ　オアイソモ　デケン　ケンド　オチョー　イッパイ　アギョートモーチ。

何のおもてなしもできませんけれどお茶を一杯さしあげようと思いまして。

中　略

特別な行事のあいさつとして盆と結婚の二つをみてきたが、両方に言えることは、改まった丁寧な形で、省略やあいまいな表現をすることはまれである。種類が少ない。日常生活と一応切り離された発想である。青年以下にはほとんどみられない。などということである。

このようなあいさつをするのは年に数回であり、重要な事柄でもあるので、場面にかなった適当な表現が出来ると、それを自由に変えたり、省略したりしにくいのであろう。だから、大きな変化もないまゝ伝承されるのだと考えられる。若い人は特別な行事に参加す

ることはまれである。まして改まったあいさつをするような立場でもないし、責任もないので、青年層には特別な行事のあいさつことばはほとんどないのだといえる。

以下略

結　び

七章にわたり安岐方言のあいさつことばをみてきた。このほかにも、正月・出産・病気見舞などの特別なあいさつ、買物のあいさつ、食前・就寝前のあいさつ等、日常生活におけるあいさつの場面は多い。また年令により形態も変かる。生活共同体の一日は、あいさつで明け、あいさつで暮れるとも言える。今まで、習慣だからくらいの気持でしてきたあいさつであるが、社会生活を営むうえで、いかに重要な機能を持つか、また先人がどのような気持で使い、育て、受けついできたかが思われ、言語というものを改めて見つめる思いである。日常生活と密接に結びつき、生活の変遷と共に言語の変遷もあることがよくわかる。ちょっとした声のかけあいにも、他人とのつながりの中でのあいさつの目的が生かされていて、方言人の生活意識が生き生きと伺える。本稿のみで、安岐方言を論じることは早計であるが、特色の一半はあいさつことばにかなり表われているということはいえる。

国東半島は、目ぼしい工業もなく、豊かな観光資源も、山地が多く水利の悪い地形で交通が発達しないため、開発がおくれ、昔から農業地帯としてひっそりとやってきた地方であるが、言語にもその影響があり、他の大分地方とはまた異質の形態がみられる。

ここでは論じなかったが、文末詞「ガエ・ナエ・その他」、助詞の音変化、人称代名詞による敬意表現、「起きる・食べる」などといった、上二段下二段活用動詞の存在、アクセントなどなど、問題点は無尽にあり、今後の研究にゆだねられるところが大きい。

中・老年層には古い丁寧な表現法が数多くあるのに比べ、青年層や子供には、歴史的影響より、外部からの新しい言語の影響の方が強いようである。また、非常に高い敬意を表わす形はあっても、めったに使用しないので途々になくなる傾向があるようである。

青年女子には、指定の助動詞「ャ」の使用や、方向を示す格助詞が「ニ」に統一されていく傾向、原因、理由を意味する接続助詞「ホデ」の衰退、個々の単語の著しい共通語化などの現象がみられる。女子はことばに敏感で、方言の変化は女子、殊に青年女子に最も早く新しい傾向がみられることは、『九州方言の基礎的研究』その他にも述べられているが、当地のあいさつことばにもそれは言えるようである。やがて新しいことばは、青年女子から青年男子へと広がってゆき、青年層と中年層のあたりを境に、安岐方言は大きく変化するであろうことが予想される。

近年、四国からのみかん栽培移住者の急増、杵築市を中心に紡績工場の進出、新空港の建設と、急速な発展、開発が進みつつある。これによる言語の変化も当然考えられる。今後の変化に、遠い目を向けねばならないであろう。